

（最優秀おはなしエンジェル賞 中学生の部）

高性能掃除機？

中二・大江 達也

「掃除機、壊れちゃった」

日曜日の午後、ソファに寝そべってテレビを見ていたおれに、妻が言った。動かなくなったという掃除機のホースを持って、ソファの前に立ちつくしている。

「どうした？ 吸う力が弱くなったのか？」

上体を起こしながらおれが聞くと、妻は首を横に振る。

「じゃなくて、元からダメだったかも。スイッチを入れても、ウンともスンともいわないの。この間から調子悪いと思ってただけだよ」

妻は、困り果てたような様子だった。家事を趣味にしているような人だから、そのための武器を失うことは大打撃なのだ。

「どれ、見せてみなよ」

おれは自分でゆうのもなんなんだが、手先が器用だし、機械にも強いほうだ。掃除機の構造なんて単純だから、簡単な修理ぐらいならできる自信もあった。家にはハンダごてもあるし、音が出なくなったラジオを直したことだってあった。

「たぶん、あなたでもむりだと思う」

「そう？」

妻はやけに自信たっぷりだった。なぜそんなに自信があるのかと問いかけそうになったが、それをするのはやめておいた。毎日使っ

ている人が「壊れた」と言うのだから、その感覚を信用したほうがよさそうだし、ここで説明を求めても話をこじらせるだけだ。おれは家庭の和を重んじる選択をし、話題の方向性を変えた。

「その掃除機、何年前から使ってたっけ？」

「えっと：いつ買ったんだっけかな？」

妻は真剣な顔つきになり、指折り数え始めた。結婚して5年、初めて見せる真剣な表情だった。

「確か、私が社会人になって何年か経った頃よ。年でいうと25ぐらいのときだから、もう8年は使ってると思う」

妻は33歳だから、計算は合っていた。25歳という記憶も、おそらく間違っただけだ。

「8年だったら、もう寿命と考えていいだろうな：。それなら新しいのを買えばいいじゃないか」

「じゃあ、今から買いに行かない？いいのがあるんだけど：」
と、妻はスマホの画面を見せてくる。それはメーカーのウェブサイトで、掃除機の性能を紹介する動画だった。

「これが欲しいのよ。ほかのメーカーのと比べて、性能がいいでしょ？」

なるほど、妻の狙いはこれだったのか：と思いつつ、おれは動画を覗き込む。外国人の女性が英語でしゃべっているナレーションに、日本語のじまがついていた。

『当社の掃除機最大の特徴は、タンクにゴミが溜まっても吸う力が衰えないこと。じゅうたんやカーペットの毛羽はもちろんのこと、先端のアタッチメントをつけ替えれば和室にも対応します。ほら、畳の隙間に入った細かいゴミもご覧のとおり：』

「うん、いいね。買いに行こうよ」

「ホント？ありがとー！」

さきほどまでの困り顔とは打って変わって、妻は満面の笑みを見せた。期待していた額には届かなかったもののボーナスが出たことだし、これぐらいのことをしてもいいだろうと、おれはほんの少しだけ鼻を高くしていた。

「すごいよ、やっぱりすごい！」

念願の高性能掃除機を購入して帰宅し、さっそくリビングルームのカーペットで試してみた妻は、驚きの声を上げた。その言葉どおり、年を経て薄汚れていたグレーのカーペットは見る見るうちにきれいになっていった。

「おお、確かにきれいになるな。音も静かなのに、すごい吸引力だ」
おれも、妻と一緒に驚いた。

「CMでも言ってたもんね。カーペットの毛羽立ちを簡単に取れるって」

こんなプレゼントで妻の機嫌がよくなるなら、7万円も高くない。おれはそのとき、本気でそう思っていた。

翌日、仕事から帰ると、部屋の様子がどこか変だった。特に目立っていたのは、リビングのカーペットの色が変わっていたことだ。

「カーペット、どうしたの？」

妻に聞くとなにやら上機嫌の返事が返ってくる。

「あんまりきれいになるから気持ちよくて掃除機をかけてたら、カーペットそのものがなくなっちゃったのよ。だから、新しいのを買ってきたの」

「そりゃまた、すごい掃除機だな」

おれは妻は冗談を言っていると思っていた。いくら高性能とはいえ、カーペットを丸ごと吸い込む掃除機なんて、あり得るはずもな

い。

「今日はずっと掃除をしていたの。床も壁もピッカピカになったよ」
じまんに話す妻を見て、おれもうれしくなった。

さらに翌朝、会社に出かけるおれは妻に聞いた。

「今日も新兵器を使って大掃除？」

「うん、もちろん」

そしておれは愛妻弁当を受け取り、会社に向かった。年度末で忙しい業務を切り抜ける一日を終えて帰宅すると、自宅周辺の風景が変わっていた。

おれの家がないー。

4980万円の35年ローンで買った家があった場所には、掃除機を握りしめた妻がポツンと立っていた。声をかけると、妻はおれに振り向いて言った。

「この掃除機、やっぱり高性能よ。だって、家ごと全部吸い込んじゃったんだから」



画：星野イクミ